

氏名	CHANA
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	甲第590号
学位授与年月日	令和4年3月18日
審査委員	主査 教授 和田 耕一郎 副査 教授 原田 守 副査 准教授 矢野 貴久

論文審査の結果の要旨

潰瘍性大腸炎 (ulcerative colitis; UC) に対するタクロリムス (tacrolimus; TAC) の有効性は既に確立されているが、有害事象の一つである腎機能障害の詳細は明らかにされていない。申請者らは、寛解導入目的に TAC を使用した UC 症例の腎機能を後方視的に調査し、寛解導入中および投与中止後の腎機能の推移を解析した。2009 年 4 月～2019 年 3 月の間に、島根大学医学部附属病院において中等症～重症 UC として TAC が投与され、1 年以上の経過観察が可能であった 55 症例 (年齢中央値 39 歳、男性 41 名) を対象とした。腎機能は推定糸球体濾過量 (eGFR) を用いて評価した。TAC 治療により 67.3% の患者が 12 週以内に臨床的寛解を達成し治療効果は良好であった。また、eGFR の低下は投与開始 1 週間後よりほぼ全例で認められ、ベースライン値からの変化率は 12 週目で -20.3% であった。一方、TAC 中止後に eGFR は改善する傾向にあったが、中止後 2 年でもベースライン値までの回復には至らなかった。12 週目の eGFR 変化率に与える因子を多変量解析で検討したところ、年齢 ($\beta = -0.3242$, $p = 0.0103$) および TAC 投与中の最大血清トラフ値 ($\beta = 0.3563$, $p = 0.0051$) が有意な因子として抽出された。さらに、eGFR 変化率を高年齢者群 (60 歳以上) と非高年齢者群 (60 歳未満) で比較すると、TAC 投与中および中止後 2 年間のいずれにおいても、eGFR 低下率は高年齢者群で大きかった。